

『海外新聞』の関与者

本間潜蔵（本間清雄）伝覚え書

稲村 徹 元

目 次

- 1 「1人おいて」の歴史像
- 2 『海外新聞』と本間潜蔵

- 3 本間潜蔵の前半生
- 4 「徳川民部卿隨行」の謎
- 5 維新政府における翁の活躍二、三

1 「1人おいて」の歴史像

先年、某近代文学研究家の「研究余滴、風のエッセイ」中に、「1人おいての歴史像」とでもいうべき論を見出したことがある。たとえば、明治43年までは残っていたという樋口一葉旧居（当時の本郷丸山福山町）の庭先で、偶然そこに居住した森田草平をかこんで集まった十余人の写真を示し（馬場孤蝶『明治文壇の人々』昭和17刊。口絵）、「前列左より岡田八千代……与謝野寛、1人置いて森田草平」とか「後列の著者〔馬場〕、与謝野晶子、1人置いて上田敏……」などと説明された場合、おゝむね著名人でないからと——この例なら、掲載書刊行の昭和17年という時限からも——オミットされたようだが、その「1人置ひとりおかれた人（この場合でいえば、前列で、与謝野寛と森田草平のあいだの男、後列なら、晶子と上田敏のあいだの青年の計2人を指すが）こそ研究されるべき存在ではないか……といった論旨の文である。事実、今次大戦後のまだ混乱期の頃、ある文壇回顧を語る会で、栗原古城氏（前出森田草平と同時期の東京帝大英文科卒。戸川秋骨や平田禿木らと国民文庫刊行会から英米硬

派文学訳書を多く出す）であったか、「この1人おかれているのが私ですよ」と微笑みながら、貴重な写真などを示され、毒気を抜かれた記憶がある。単に文学史に限らず、いかに巷塵に埋もれ、人名辞典に名を留めぬ人が多く、世に隠れた名流の多いことか。今、ここに記述を進める本間清雄翁のごときも、幾冊かの成書にその令名を鏤めているにせよ、同時代人、いや、鷗外の名篇『渋江抽斎』にいわゆる「コンタンポランとして、横町の溝板上どぶいたに袖すれ合った」仲の清水卯三郎⁽¹⁾、杉浦愛蔵⁽²⁾において近年見出すごとく、その伝記に1書を宛て得ないのは何故であろうか。後述のごとく、日本新聞史上に、必ずといってよい、ジョセフ・彦（アメリカ彦蔵）、岸田吟香と並び記されながらも姿を没してしまう。しかも仔細にその名の出没を資料の間にとどれば、あたかも前記の清水卯三郎の活躍にも似た多方面での尽力ぶりが維新前後を彩ることを知られ、なおのこと、「不遇な先駆者哉」の感無きを得ぬ。以下は近年、奇縁により知遇を得ながら*詳しく伺えぬ裡にお別れした、その子息本間信一氏（昭和46年10月没）の霊へのお詫びを兼ねつつ、若干の先行文献を点

綴する態のいわばレファレンス回答的な“覚書”としたい。

*偶然本間家が稿者の隣家であり、昨秋、信一氏の葬送に当り、その父清雄翁の閔歴を伺って『植村正久とその時代』の記述に当り得て、この稿をまとめることができた。

2 『海外新聞』と本間潜蔵

本号特集の趣意に寄せ、標題に記したところからいえば、この項が本稿の主眼目と見るべきであろうが、実はこのテーマについては略々文献も出尽している⁽³⁾。そこで、現在もっとも論ぜられている点は、『海外新聞』の創刊年月、その前身として、『新聞誌』なる刊行物の認め得るや否やにあり、肯定的な結論につきかなり実証的に裏付られて⁽⁴⁾いる。稿者は、ここではいささか羊頭狗肉の難を免かれぬものの、前述のように、『海外新聞』への関与者としての役割のほかは全く忘れられたというも過言でない、本間潜蔵（清雄）の存在を、明治初年文化史の其処彼処に再発見したいのだが、一応、常識として『海外新聞』との関係に触れねばならぬ。

日本の新聞史書を繙く者は、そのいずれもが劈頭近くにジョセフ・彦（以下“彦”と略す）による『海外新聞』の刊行を挙げ、それが“外人（経営）最初の邦字紙、あるいは“民間最初の新聞”との栄を担っていること⁽⁵⁾を知るだろう。

「元治元年（1864）まず『新聞誌』と題した筆写で始まり、『海外新聞』と改めてのち、慶応2年、彦の長崎移住で消滅した」が（近盛晴嘉氏のまとめ。注(4)の文献参照）、彦、岸田吟香、本間潜蔵

（清雄）三者の交遊は、彼等の数奇な流離にかかわらず、後年まで続いたばかりでない。彦の養女は「物理学者本間義次郎⁽⁶⁾」（潜蔵の本間家とは無関係）に嫁つぎ、その子には、彦の協力者であった本間の名に通じる“清雄”という名が付けられた（明治35年夭折）という。彦、吟香についての数多い伝記書に、本間潜蔵後年の姿が描かれていないのは淋しい。

3 本間潜蔵の前半生

『海外新聞』との関係を離れ、本間翁の伝につき、我々が広くこれを知ることのできるのは、佐波亘編『植村正久とその時代』（昭和12—16刊。〈昭和41—42年復刻〉の第3巻）に再録された、翁の没後（大正12年7月31日 81歳で病逝）、『福音新報』（同年8月9日号）に掲載の追悼記事であろう。晩年の翁の身边に親しかりし人の筆になるとはいえ、維新前後の広範な多事につき記されたその逸事について見た場合、現在、整理された近代日本史諸領域の文献に個々の例証を求めれば、いささか補正を要する点無しとせぬ。以下、その記述の過誤と見られる点に触れつつ、翁の前半生を素描しよう。「天保14年〔癸卯 西暦1843に当る〕静岡県小笠郡平田村に生る。医春越の次男」とあるのは、遠州掛川藩（太田氏）藩医の家という。「14歳郷園を出でて静岡明進館に漢籍を学び、のち東京築地の軍艦教授所に海軍の術を研究、……武州熊谷在の寺門静軒の門を叩き、後の外務卿寺島宗則に遭ひ、就て英語を学び、更に横浜に出でて、ブラオン、タムソン、

バラ氏より外国語の教授を受けたり」云々とあって、それが「26歳にて、吟香、彦の両氏と協力して『海外新聞』を」とつながる。前記に翁が「海軍の術を研究」とあるのは、さらに現在本間家に残されている翁の令甥本間精（くわし、故人）氏が調べたメモに拠ると「軍艦教授所に学ブ、教官塚本桓輔タリ」と説かれる。

幕末海軍の歴史は、嘉永年間、ペルリ来航におびやかされる裡に萌生え、安政2年（1855）の和蘭による汽船献贈、勝安房の海防意見上申などに始まり、和蘭指導下の長崎海軍伝習所の設立⁽⁷⁾から同4年、築地講武所内への軍艦操練所開設（のち海軍操練所。維新後、兵学寮が建てられた我国海軍発祥のメッカ）と発展する。その中で、幕臣から出た塚本桓輔はやがて「通弁掛り、生徒取締兼務・軍艦役」を務め⁽⁸⁾、明治に入ってから沼津兵学校一等教授⁽⁹⁾、陸軍、内務省へと転ずるが、『日本地誌提要』（地理寮明治7～12刊）の大著をなした塚本明毅として著名である（内務少書記官 明治18年2月5日没⁽¹⁰⁾）。しかし、翁の出身が掛川藩ならば、当然、安政2年末海軍伝習所第1回生に投じた唯一の掛川藩出身者⁽¹¹⁾ 甲賀源吾に従うことが無かったのか。榎本、勝ほど人口に膾炙せぬとはいえ、戊辰内戦の棹尾ともいべき宮古湾での海戦に、その壮烈な死により戦前長く、海軍魂の龜鑑とされた『回天艦長甲賀源吾伝』（昭和7刊。同8年訂再版）に本間翁の名を見出せないのも淋しい。「築地軍艦教授所に海軍の術を研究」と

すれば安政4、5年の頃、天保14年生まれ翁としては15、6歳の際であり、その前の静岡学習時代は14歳というから僅々、1、2年の間と見なければならぬ。前掲の履歴をくり返せば、次いで「…寺島宗則に遭ひ……更に横浜に出て、ブラオン、バラ氏より外国語の教授を受けたり」と続く。外国（英）語の履修につき、人、処によって種々の方法があるうが、（蘭医から出た＜松木弘安の＞）寺島にまず学び、ついで異人に直接教えを受ける——というのが自然かも知れない。だが、今日判明する彼我の消息を年次表風に再編構成すると、以後、元治元年＜1864＞（6月という）の『海外新聞』＜というよりはその前身の『新聞誌』＞の創刊への参画まで、翁の——いや、「外国へ行きたい一心で飛び歩いた」（翁の回顧談を伝聞する本間信一未亡人の表現）——若き青年本間仙蔵（仙蔵が当時の本名）の身边は多忙に過ぎる。安政末年（安政7年＜1860＞）3月、万延と改暦）から文久1～3年と足かけ4、5年の間、その活動についてはやや空白といえようか。

安政5年の条約調印により6年になると、ブラオン⁽¹²⁾（S. R. Brown 1810—1880）へボン（J. C. Hepburn 1815—1911）バラ（J. B. Bullagh 1832—1920）ら米国宣教師の相次ぐ来日（神奈川上陸）がある。のちに吟香や彦、本間さらには清水卯三郎とも交渉をもつヴァン・リード⁽¹³⁾（Van Reed）もこの年に来日したという。一方で、寺島宗則がこの時期、「武州熊谷在」に居ったというの

は、史実の隠れた一面を覗かせる。文久3年(1863)の6~7月にかけてのいわゆる薩英戦争で、英国艦隊に捕えられた寺島<松木弘安>と、五代才助(友厚)は、英国側に顔の効く俠商清水卯三郎(武州羽生の人)に救われ、卯三郎の縁筋である熊谷在奈良村の吉田家に潜伏⁽¹⁴⁾、翌元治元年4月、寺島(松木弘安)は江戸に入ったという。のちのちまで、「この間寺島、五代二人とも外国に亡命」と誤り伝えられた程というから⁽¹⁵⁾見事な潜伏であったろう。のちの外交官本間清雄は、この時期、寺島の知遇を得たところに始まるといえようか。おそらくは卯三郎の広い交友関係の中から、横浜でのブラオン、バラ、ヴァン・リード、ヘボン、吟香および彦等々相互の結びつきが——時、人によってはいささかの反目、離合あい半ばするにもせよ——、お互いの信頼関係を築き、本間翁の青年時代、異国情趣へのときめき*を育くんだであろうか。

* 上掲『植村正久と其の時代』(第3巻)所掲の本間翁追悼記事によれば「ブラオン師の家庭を訪ひたりしに、その和氣霽然たる……大いに感ずる所あり、熱心に斯教〔キリスト教〕を研究したり」とある(受洗は明治7年渡欧中……同書)。

4 「徳川民部卿随行」の謎

「海外渡航を志し、(仙蔵を)潜蔵と偽称し」「洗濯屋のあっせんで」、彦の書記となった⁽¹⁶⁾という本間青年の夢は、「徳川民部卿に随ひて歐洲に渡り」果たされる。慶応3年1月から明治2年の帰京までのこの渡航について、いわゆる

『チョンマゲ大使海を行く』他公私の信用おける記録書にも翁の名前を見出せないのは何故であろうか。『徳川昭武滞欧記録』『渋沢栄一滞仏日記』(いずれも日本史籍協会叢書。近年復刻された)をはじめ田辺太一(蓮舟)、栗本鋤雲の回想記の類⁽¹⁷⁾あるいは近年、彼我の文献を博搜かつ興味深く記された前記の万博史(『チョンマゲ大使海を行く』高橋邦太郎 昭和42刊)にも現われぬ。すでに瓦解寸前ながら、幕府最後の使節として「節約本位に人選せよ」との沙汰を受けつつも、仏蘭西語伝習所で速成の何人⁽¹⁸⁾か、あるいは水戸藩の「コチコチ頭の七人衆」(前出高橋著の表現)なども交え廿余人を数えた一行の記録⁽¹⁹⁾を丹念に繙くと、わずかに民部卿随行の二、三につき従う従者・下僕中、その氏名、進退の判然とせぬ者あることに注目できる。

民部大輔(14歳の徳川昭武)の「御小姓役」山高石見守信離(のぶつら)は元より幕臣であるが、維新後その履歴につき「浜松県士族、元静岡藩」と答えている⁽²⁰⁾。——他にも、例の清水卯三郎が茶店女三人ほかを連れて別の船でパリに乗りこむが、これに便乗と考えるよりも——「いつも渋沢(篤太夫、のちの栄一)さんの傍にいて注意しないと、(渋沢さんは)メニューなど平気で逆さに読^よんでしまう」といった後年の翁の回顧談を耳にすれば、民部卿のお守役で実力者ながら怒りっぽいという山高石見守の傍あたり居て、たえず民部卿、石見守、渋沢あるいは向山隼人正(正規の外国奉行)とも行を共にしていたと考える方が自然

かも知れない。

5 維新政府における翁の活躍二、三

維新後、2年帰朝後における本間清雄の履歴は「24年7月弁理公使（勅任官）、従四位」に至るまでのオーストリア、プロシア在勤を主とした外交官生活。「29年8月、特進幹事を嘱託」されてから大正12年7月死して弔辞を受けるまでの日本赤十字社とのつながり、それと在欧中、明治7年に受洗したというキリスト教信仰の心の生活（以後植村正久の東京神学社に献身した晩年に至る）、この三つの時期⁽²¹⁾を画し得ようか。2年10月外務少録（外務卿には寺島がなった）に任ぜられた翁の外交官生活の出発をまず飾ったのが、2年11月1日「電信機天覧オーストリア・ハンガリアの儀」であろう。奥太利洪喝利国全権公使より献上の「エンボッシング・モールス電信機⁽²²⁾」2台を外務大録訳官子安竣と操り、「宮中、山里御茶屋より御学問所まで仕かけ、其間1丁半に過ぎずと雖も…初めて烏帽子装束にて」天覧に供したのは冷汗ものだった、とその感激を郷里の父に伝え、家族にもよく話したという（前掲本間精氏のメモ<昭和5年作成>による）。わが国最初の電信開通（明治2年12月25日）に先立つエピソードの最たるものといえよう。

維新政府の諸事一新の一つとして、当然ながら幣制の改革がある。初めドイツ産の紙幣いわゆるゲルマン札を用いたが、「紙質が脆弱で損傷が多く、国産製造に変更」せざるを得ない。よって、従来の「ドンドルフ会社と交渉しつつ、製

造機械の購入、外人技術者の雇入れ」を決意した⁽²³⁾政府では、7年に入って得能良介の紙幣寮頭となるやこの政策の実現に力を注ぐ⁽²⁴⁾。7年12月、ドイツからの器械と技術者が到着するが、その交渉とくに技術者の選抜は「在欧の三等書記官本間清雄⁽²⁵⁾」の努力が実ったという。リーベルス、ブリュックらの技術者はついで来朝のキヨソネと共に、優秀な技術を惜しみなく初期印刷局の技術向上に役立たせた。なお、『印刷局史』等には触れてないが、翁当時の履歴中に、「明治4年9月〔外務省からの〕（孝国<プロシア>）留学を免ぜられ、紙幣製造検査係〔を命ずる〕」辞令の記録されているのも⁽²⁶⁾興味ぶかい。

さらに明治5年、「澳国博覧会事務取扱」を発令され、7年に三等書記官、14年には澳国公使館書記官（年俸630磅ポンド<16年には680磅>）と、在欧のほとんどをウイーンに送った翁にとっても、澳国博覧会（明治6年5～11月開催）は働き甲斐のある数カ月であったろう。

なぜなら、わが国派遣の事務スタッフ——即ち、副総裁佐野常民、一級書記官はあの山高信離とあれば、共にパリ万博以来の知己である。さらには『澳国博覧会参同記要』（明治30刊）所収の「事務分担表」によれば、翁は、一級事務官古川正雄の下で、「海軍大録 寺西積」と共に編集目録を担当している。其処に亦ながしかの縁えにしの糸を見出そうとするのは思い過ごしであろうか。古川正雄といえば、福沢塾門での前名岡本節蔵というよりは⁽²⁷⁾、去る戊辰戦の棹尾を飾った宮

古湾の海戦に、秋田藩高雄号の船長としてよく官軍に抗した勇者である⁽²⁸⁾。——寺西某については、この際まさに「1人置かれた」存在で、全く知る処無いが一、異邦に在って時には共に海を語ったかも知れぬこれら3人のことについては、古川正雄の短い「洋行漫筆」(『明治文化全集 外国文化篇』所収)でも無論触れてはいない。

注(引用および参考文献)

- (1) 長井五郎『しみづうさぶらう略伝』昭和45刊。
- (2) 高橋善七『初代駅通正 杉浦讓伝』昭和46刊。
- (3) 近盛晴嘉『ジョセフ=ヒコ』〈人物叢書〉昭和38刊。とくに20~23節。なお巻末に「参考文献」40点ほどがある。
- (4) 上記(3)参照。近盛晴嘉『『海外新聞』の創刊年について』(『新聞研究』250号 昭和47.5)
- (5) 小野秀雄『日本新聞発達史』大正11刊。蛭原八郎『日本欧字新聞雑誌史』昭和9刊。西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』昭和36刊。その他多くの新聞史を参照。
- (6) 花園兼定「入沢先生と彦蔵」(『洋学百花』昭和14刊) p290~293。(3)にも詳しい。
- (7) カッテンディーク著水田信利訳『長崎海軍伝習所の人々』〈東洋文庫〉昭和39刊
- (8) 石橋絢彦『回天艦長 甲賀源吾伝』昭和7刊 p48。
- (9) 米山梅吉『幕末西洋文化と沼津兵学校』昭和10刊 p97。
- (10) 大植四郎編『明治過去帖』昭和46刊。
- (11) 同上『回天艦長 甲賀源吾伝』p5。
- (12) <S. R. ブラウン>昭和女子大学『近代文学研究叢書 第1巻』昭和31刊所収。

(13) ジョセフ・彦, 岸田吟香関係の諸書のほかつぎの文献がある。

重久篤太郎『日本近世英学史』昭和16刊所収。「幕末・明初に於けるヴァン・リードの文化活動」p292~314。

- (14) (1)の長井前掲書 p63~69。「寺島宗則自叙伝」(伝記3巻4~6号 昭和11)も参照
- (15) 上掲。長井五郎『しみづうさぶらう略伝』p69。
- (16) 小野秀雄「ヒコの『海外新聞』について」(『新旧時代』1年1号 大正14)。石井研堂「海外新聞解題」(『幕末明治新聞全集2』昭和9刊)。
- (17) 田辺太一『幕末外交談』明治31刊。栗本鋤雲『曉窓追録』ほかく栗本鋤雲遺稿 昭和18刊>。
- (18) 西堀 昭「わが国における仏語教育史」(『千葉商大論叢』9号以降 昭和43~)
- (19) 『徳川昭武滞欧記録 1』昭和7刊。
- (20) 『百官履歴 下』昭和3刊。p323。
- (21) 故本間信一氏遺蔵の辞令写ほか。
- (22) 奥谷留吉『日本電気通信史話』昭和18刊。p157。
<郵政総合博物館事業課示教による>
- (23) 『大蔵省印刷局百年史 1』昭和46刊。p158。
- (24) 渡辺盛衛『得能良介君伝』大正10刊。および(23)も参照。
- (25) 同上および大日本文明協会『明治文化発祥記念誌』大正13刊。
- (26) 上掲(21)と同じ。
- (27) 丸山 信『福沢諭吉とその門下書誌』昭和45 p83。
- (28) 上掲(8)と同書。p190, 208

<'72.7.11稿>

(いなむら・てつげん: 索引課主査)